

ホモ・マキナリウスのアイデンティティと化粧 －人類と化粧の未来像に関する現象学的考察－

石 田 かおり*

Identity and Beauty of Homo Machinalius -A Phenomenological think on the Future Image of Human Being and Beauty-

Kaori ISHIDA*

Abstract

Recently the unifying between human body and machine, and also between human brain and computer is in progress with accelerated, such as human expansion engineering. The appearance of new human species, so-called transhuman, is suspected to realize in the decades. As well knowing, the futurist Ray Kurzweil has advanced the time is in 2045, so-called the Technological Singularity. To unprejudiced philosophical think and argument we call the new human being as “homo machinalius” in this paper. This latinic name descended the naming of biological anthropologist Mamoru Tomita.

In phenomenological standpoint self-image and identity of homo sapience are not substances but images, which come up at the node of the meaning-giving (Husserl’s technical term “Sinnggebung” in German). On the other hand it is not possible for homo machinalius to have self-image and identity. Because homo machinalius always can easily change body and brain (memory). For homo sapience self-image and identity are images. Images are fragile. Therefore, we need constantly repair, renew and confirm them. One of the dominant way of repair and confirm is the beauty culture. At the fact in human history the beauty culture has been exist as human culture and the beauty culture has universality in time and space. On the contrary of homo sapience, homo machinalius has no self-image and identity, so they do not need the beauty culture. Of course, they can do make-up and hair-styling but for them the inevitability of the beauty culture shall disappear.

1 研究の動機と目的

現代社会では、機械と人体の一体化が目覚ましい勢いで進行中である。人工心臓はわかりやすい例であるが、機能不全に陥った臓器を機械

の臓器に置き換えるという形の機械と人体の一体化は珍しくない。しかし、こうした方法だけが機械と人体の一体化ではない。介護ヘルパーなどの介護を担う人材の身体的な負担を軽減す

*人文学部 人間関係学科

る目的や、足腰の筋肉と関節機能が衰えた高齢者が安全にかつ楽に動くことができる目的で、身体に装着するロボットが開発され、実用化に向けて試行中であり、近く実用化と普及が期待されている。この装着型ロボットは高齢者関係だけでなく、運送業など他の業界にも普及することは容易に想像できる。人工臓器や装着型ロボットは、いずれも身体機能の一部を補う形での機械と人体の一体化であるが、このほかに別の一体化の方法もある。携帯電話の普及前はよく通話する相手の番号を20件から30件程度暗記しているのが当然であったが、携帯電話の普及以降は電話番号を暗記しなくなった人が増加した。電話番号ばかりではない。スマートフォンの普及以降は、スケジュール管理もスマートフォンに任せる人が増加している。その場合は自分の予定はほとんど記憶しておらず、スマートフォンに記憶させて、スマートフォンからの知らせに頼っている。電話番号やスケジュール管理の外部化は記憶の外部化である。すなわち、脳機能の一部を機械に預けていることであり、こうした形での機械と人体の一体化も現在では進行中である。こうしたことから、近い将来機械と人体の一体化がさらに進化した人類の姿を想定した研究を進めることが、人間の身体の問題を扱う研究にとって目下の喫緊の課題ではないかと考えられる。

前述の一般論に加えて、今回このテーマを取り上げることにしたのは、人間拡張工学と人工知能の目覚ましい進展が契機になっている。遠くない将来、人間の生活ばかりか身体という概念そのものも変わらざるをえない時代が到来する可能性を鑑みて、基幹学としての哲学がこのテーマを扱う必要があると考えたためである。

人間拡張工学（英語 human expansion engineering）とは、科学技術を用いて人間の能力を拡張し高める科学である。この語は日本では、

2010年の一般社団法人日本人間工学会にて初登場した。ほかに、ヒューマンオーグメンテーション（英語 human augmentation, 注1）や、英国が主流のトランスヒューマニズム（英語 transhumanism, 注2）など、類語が存在しており、いずれも人体を中心とした人間の能力を科学技術を用いて拡張する研究や技術を指す。

たしかに、広い目で見れば、今日までの人類の文明の歩みは全体的に人間の身体能力を拡張する技術の歴史であり、すなわち一種の人間拡張工学の歴史でもあったととらえることができる。狩猟採取において獲物をたくさんかつ確実に得るための道具の発明や開発・改良は、人の手で投げるよりも遠くに飛ぶ道具や、人の手で殴るよりも相手により強力なダメージを与える道具、人の手で運搬するよりもより多くを労力を少なくして短時間に運搬できる道具などがある。農耕の時代を迎えれば、人の手で土を掘り起こすよりも多くの面積の土を短時間に掘り起こすことができ、なおかつ人体の負担が軽くなる道具などが作られるようになり、やがて機械化し、石油由来の動力も使うようになり...という周知の技術革新の経過をたどっている。それゆえ、人間拡張工学という語がなくとも、人間拡張工学に相当することは人類の営みの主要な部分であり続けたため、いまこの問題を取り上げる必要性はないという反論が想定される。これに対しては、近年の斯学の目覚ましい進展とその成果を示すことで反論したい。従来の人間の身体能力を拡張する技術は、生産・運搬・通信などの主として軍事や産業の面で人体とは別に存在する道具を開発することが主流であった。これに対して2011年に新語として登場した人間拡張工学は、それまで社会生活上の不便を取り除く目的で人体の欠損を補う補綴が主流であったものをさらに進展させたもので、人体そのもの、身体能力そのものを高める点が新規で

ある。たとえば義足は足を失ったことによる不便さを補い、足があったときと同じような生活を送ることができることを目的にしてきたが、近年の運動競技会では、義足の走り幅跳び選手が義足をつけていない走り幅跳び選手と同等かそれ以上の記録を出すような成果があがっている。こうした技術を身体に装着するか否かは従来のように障害の有無で決定するのではない。身体と科学技術が融合することで開ける新たな身体能力の獲得が人間拡張工学の目指すところであり、従来の人間の身体能力の補綴型の道具とは異なる点にある。すでにゲームではプレイヤーがゲームに登場するキャラクターになってゲームの世界の中の住人の目で一種のリアリティをもった体験として状況を見て行動することが行われているが、いまのところ現実とゲーム内世界の区別はだれにとってもきわめて容易なものである。人間拡張工学の進展は、ゲームなどの技術による架空の時空内で体験したことが現実に体験したことと変わらぬようになる技術であり、これは近い将来実現する見込みである。

ところで、人間拡張工学と並んで、人間の身体の一部でもある脳機能の拡張として、人工知能(AI)とその研究開発がある。こちらはカーツワイルのシンギュラリティ説(注3)などから、近い将来人工知能は人間を超えた能力を持ち、その思考は人間が理解できないものになり、社会の至るところで活躍し、主流になるばかりか、従来人間が携わってきた多くの職業を奪い、労働も生活も社会も大きく変わると考える者が多数存在する。将棋では2012年以来プロ棋士が人工知能に負け続けている。2016・17年と人類に勝利した人工知能「ポナンザ」の開発者である山本一成は、ポナンザはあらかじめ人間が作成して仕込んだプログラムに基づいて将棋を指しているのではなく、自身で学習して指してい

るため、何が起きているか開発者の自分でもわからないという趣旨の発言をしている(注4)。自己学習能力を獲得した人工知能がどのような思考回路で反応しているのか、すでに人間には知り得ないものになっているという事実がある。人工知能は現在こうした段階に至っているが、それがすなわち人間の能力を超えてより優れた知的存在者になり、人間の支配者になるのかというと、それは別の問題であると考えられるので、この論文ではその論争に立ち入るつもりはない。ここで人工知能の進展を取り上げるのは、人間拡張工学に人工知能が加わることで新たな技術革新が起き、人類にとって未知の新たな社会が到来する可能性が否定できないからである。

身体も脳も機械と一体化した人類が通常存在となった新たな社会の全体像を、概要であれ示すことは到底できないが、価値判断に関わる哲学としては、新たな社会の到来で問われる問題点を洗い出す作業はしなければならない。そこで、この論文では差し当たり筆者が専門とする現象学の方法を用いて、これまで長年専門にしてきた身体の美的価値(とくに美容)の点に限定して、考察を試みたい。

2 新たな概念の導入：「ホモ・マキナリウス」

人体と機械が一体化した「人体」の新たな局面の考察を進めるに当たって、1点新たな概念を導入する必要がある。それは、機械と人体の一体化が進化した社会における人類のことである。ここで想定している社会は、人間という個体のどの程度の割合が機械でどの程度の割合が生物か、という割合の問題を超えた時点を想定している。たとえばここに3種類の人類がいるとする。(A)は90パーセントが生物で10パーセントが機械の個体、(B)は50パーセントが生物で50パーセントが機械の個体、(C)は90パーセントが機械で10パーセントが生物の個体

であるでしょう。これら3種のいずれが人類で、いずれが人類でないか。たとえば(A)は人類と認められるが(B)は意見が分かれ、(C)は人間ではない。こういったことが問題になることなく、(A)(B)(C)すべてが人類と認められる、すなわちどの程度が機械であれすべて人類であると認識される社会である。100パーセント機械であっても人類と認められる社会を想定しておく必要がある。現在の人間拡張工学は現状の人類の身体機能を拡張した状態の追究であるので、その視点では(B)や(C)が人類と認められる可能性は低いが、ここでの考察では、さらにその先の状態が日常的になった社会のことを考える。

人類学者の富田守は人類学の歴史を振り返ることで人類そのものの歩みを概観した後で、今後の人類が進む可能性をいくつか示している。その中に、「自らが生み出し、発展させた文化的人工物と合体・融合した身体を持つ人類」(注5)の可能性を明記している。富田は文明の崩壊の最大の原因は「これまでのホモ・サピエンスとしての人類の身体能力、特に脳の働きが、高度に発達し、複雑化した文明に十分ついていけないからではないか」(注6)と考えている。続けて「従って、これからの人類は、複雑に発達する文明を十分制御できる脳機能を持たなければならない。すなわち、私たちはこれまでのホモ・サピエンスよりも、もっと脳が進化した人類にならねばならないと思うのである。」(注7)と記している。そして、脳の進化には人類自身が作ったコンピュータが重要な手段となり、「コンピューターと一体化した脳の進化によって大局的な見方やひらめき思考、脳同士の直截的コミュニケーションなどが常にできるようになれば、急速に複雑化する文明の発達にうまく対処出来るかもしれない。」(注8)という仮説を立てている。筆者もこの説を採用したい。そ

れは、次のような例が見られるからである。今年(論文執筆は1997年9月)目覚ましい躍進を遂げた将棋のプロ棋士の藤井聡太四段を始め、近年将棋界で成長目覚ましい若手棋士たちは、人工知能との対局で腕を上げている。彼らは人類が自らが作った文化的人工物をうまく利用して脳の能力を上げた好例だと考えられる。スマートフォンを使って記憶を外外部化したり、空間を共有しないで顔も本名も知らないだれかと協力し合ってモバイルゲームを勝ち抜くように、現時点でもコンピュータの利用により人類は能力の拡張をしているが、脳とコンピュータが一体化すれば人類の「身体」の持つ可能性は飛躍的に変わると予想される。

人体と機械の融合が進む先には全身がサイボーグ化されるだけでなく、「脳を含む全身が金属やマシンで構成され、新しい個体を工場で生産するようになれば、その時にはまったく新しい人類種族、これまでの有機的人類に対して無機的人類」(注9)が発生すると富田は予測している。そして、新たなこの種族をラテン語で「ホモ・マキナリウス」(注10)と名付けている。筆者はこの「ホモ・マキナリウス」を未来の人類を考える上で不可欠の状態と考えて、新たな概念としてこの論文に導入したい。

3 ホモ・マキナリウスの自己同一性問題

人類がホモ・マキナリウスになれば、不老不死を手に入れることは容易である。機械を入れ替え続けることで機能的老化が解消される(不老)上に、記憶内容が消えてしまわない限り機械の身体を乗り換え続けることでいくらかでも生き続けることができる(不死)からである。それを別の観点から言えば、身体は常に変えることができる、すなわち顔も体も常に変えることができる、ということになる。それゆえ顔や身体的特徴などの外見で人を同定できないことに

なる。現在のIDカードは写真のついているものが標準的であるが、写真はもはや個人を特定する根拠としての意味を持たなくなる。

脳もいつでも交換可能であるが、脳の「内容」はどうであろうか。脳の「内容」とは何か。それが記憶であるならば、コンピュータ上の記憶であるから書き換え可能ということになる。すると、ホモ・マキナリウスにとって、自我や自己とはどのようなものであろうか。また、自我や自己の同一性とはどのようなものであろうか。

現在の人類の場合、体の一部を機械あるいは他人の臓器など、その個体の外部のものに置き換えて行き、どこまでが当初の人物であるか、その限界を考えるという思考実験ができる。現実の社会では、義手・義足・義歯や、臓器移植、人工心臓、人工関節、人工骨などがいまや有効な治療法として普及しており、そうしたものを装着したからといってその人物のアイデンティティが疑われることは本人も社会的にもまったくない。また、スマートフォンに記憶を預けて必要な時に引き出して使いこなす記憶の外部化を実施しているからといって、そのことでその人物のアイデンティティが問題になることすらない。しかし、ホモ・マキナリウスへの移行過程で想定されることとして、記憶のすべてをその人物の身体の外部的な機械に入れてしまうことが考えられる。その場合はどうだろうか。記憶を失った生物的な身体がその人物なのか。あるいは記憶を移行した機械の方がその人物なのか。機械といってもスーパーコンピュータのような巨大な装置である必要はないだろう。ICチップのような小さくて持ち歩きやコピーが容易な記憶装置の可能性も高い。すると、その人物はチップなのであろうか。

また、その人物（本人）がチップを自由に使用できるうちは問題が生じないかもしれないが、だれかに奪われてしまった場合は奪った人物が

その人物（本人）になるのだろうか。ある人物Aが別の人物Bの記憶を自分のものとして利用することができるが、その場合はどう判断すればよいのか。記憶媒体はコピーできるので、複数の同じ記憶が存在しうることになる。コピーしたチップを埋め込まれた脳の持ち主が複数存在する場合、その数だけその人物を名乗り、その人物として振る舞い、その人物として自身を認識することになる。同一人物が複数存在する事態である。あるいは、その人物の肉体が死亡した後にチップだけが残し、チップを別の人物が入手して自分のものとして使用した場合は、入手した人物が死亡した人物と同一人物になるのだろうか。肉体が異なる限りその人物を知っている人々はその人物と同一人物とは認めないかもしれないが、有名タレントやロボット工学者にそっくりなアンドロイドが現在でも現実に製造されていることから、生前のその人物の肉体をそっくりなぞったアンドロイドにチップを搭載することで、その人は不死になる可能性があるし、遺族など周囲の人々がそれを望む可能性も考えられる。

こうして考えてみると、ホモ・マキナリウスの場合は記憶装置や意識装置が容易に取り外しや交換ができる上に、脳自体の機械化も進んでいる。ということは、アイデンティティは1人に1つとは限らないことになるのではないか。複数の身体に1つの記憶ということもありうるし、1つの記憶を複数の身体を乗り換えながら引き継ぐこともありうる。1つの記憶を持った機械的身体が複数同時に存在することもありうる。さらに、記憶を書き換えて同一の身体に搭載することもありうる。身体も記憶も頻繁に交換する可能性もありうる。あらゆる可能性を考えると、その人物が誰であるのかはその瞬間、あるいはその時点に限ったものでしかないことになる。したがって、そもそもアイデンティティ

というものが成り立たないし、アイデンティティを問うこと自体が意味を持たないことにならないのではないか。自己は、たとえばそのときの「肉体」（機械的肉体）と「脳」（機械的脳）と記憶（機械上の記憶）の組み合わせに過ぎないということになり、きわめて限定的、刹那的にしか成立しないことになる。

4 自己同一性の問題を契機にした現象学の未来

たとえば事故で脳を損傷する、あるいは疾病など、非日常的な出来事に見舞われない限り、現在の人類（ホモ・サピエンス）は自我や自己はだれにとっても確たるものであり、通常はだれもが1つ持ち続けていると考えるのが、日常的な思考態度である。また、社会はこのことを前提に成り立っている。IDカードが代表的な例だろう。IDはアイデンティティの略であり、IDカードは文字通り自己同一性を保証するものである。その人物が何者であるかを何らかの組織が保証するものである。IDカードが現実に社会で流通できる、すなわち身分証明書として通用するということは、人はだれしも1つの生物的個体として実在し、その人物が過去も現在も未来も同一人物であるという前提がある。そうでないと人物の保証ができないから、IDカードは身分証明書として機能しなくなる。また、仕事であれ個人的なことであれ、人と人との約束が成り立つのは、お互いが現在も未来も同一人物であり続けると信じているからである。約束だけでない。災害や戦争の体験者の話を聞いて教訓のため未来に伝えることに意義があるとされるのも、その人物の過去と現在の同一性を社会が共有しているからである。体験者が過去も現在も同一人物であるという前提がなければ、単に他人の話のまた聞きになってしまう。このように、日常生活では過去も未来も同一人物であるという前提がある。そして、その同一

性の基軸となっているものは記憶である。それゆえ、記憶も身体も常に更新可能というホモ・マキナリウスの場合は、アイデンティティや自己の成立が困難になるだけでなく、社会における人間関係までもが大きく変化することになるであろう。

以上のように、現実の社会ではアイデンティティ成立の前提にアイデンティティの実体化、個人の個人性の実体化、生物的個体の存在の実体化、記憶の実体化が存在する。ホモ・マキナリウスの場合にアイデンティティが成立しないのは、実体が常に交換可能あるいは変更可能であることにより、実体になりえないことにある。

さて、実体がないこうした未来社会を考える上で、実体化を徹底的に排除する現象学が役に立つのではないか。フッサールの確立した現象学は、あらゆる実体を指定しないものの本質を観るという特徴的な方法を採用。われわれが実体と考えているものは、対象に対して現象学的還元を実行した結果明らかになる意味付与の交点であると考ええる。自我や自己といったものは、自我や自己という意味を与えられた意味付与の交点ということになる。ここで「その都度の具体的な個々の意味付与されるもの」の存在を仮定すれば、そうした存在がその都度さまざまな状態で存在し、意味を与えられる。われわれはその意味付与の軌跡を記述することができる。その軌跡の記述、言い換えれば物語が記憶であると考えられる。こうした現象学的な立場を取れば、自我や自己といったものは常にその都度意味を与えられて構成されたものであるため、常に新たに作り変えられるものであり、その内実である意味も常にその都度揺れ動いていることになる。それゆえ自我や自己はほんの些細なきっかけで容易に崩壊しうるものと考えることができる。そして、アイデンティティは、

揺れ動き容易に崩壊しうる脆弱な自我や自己の軌跡を一種の物語として記憶したものの集合体ということができる。一般的に人間は自我や自己が崩壊してしまうとアイデンティティを失うことになるので、一瞬たりともその状態に耐えることができない。それゆえ崩壊することのないよう修正し、更新し、その結果を確認する作業を怠ることなく行わなければならない。すなわち自我や自己を修正・更新し、確認する作業を日常的に絶えず行っているのが人間であると言える。しかし、新たな人類であるホモ・マキナリウスの場合は、そもそも自我も自己も常にその都度のものでしかないため実体化が困難である。また、自我や自己が常にその都度のものであるということは、自我や自己の崩壊の憂慮から解放されていると考えられる。以上は哲学的な表現であるが、日常的な表現をすれば、自分というものはそもそもいつでも自由に交換可能であるため、「自分がなくなる危機」ということ自体が意味を持たず理解不能な表現になる。

ホモ・サピエンスの哲学では、古代ギリシャ以来のさまざまなアポリアを回避するために現象学は有効な方法であり、一定の成果を得ていたが、ホモ・マキナリウスがもし哲学をするならば、ホモ・マキナリウスの哲学にとっては現象学の意義がなくなり、現象学的思考法は不必要になると考えられる。これが現象学の未来像の1つである。また、自我や自己は常にその都度のものであり、アイデンティティが成立しないことから、哲学そのものがホモ・サピエンスの哲学とはまったく異なるものになると予想される。それがどのような姿であるのか、すべての思考の出発点を自我や自己に置くホモ・サピエンスの思考法が浸透した筆者の想像を大幅に超えている。いずれにしても、身体のあり方が哲学に多大な影響を与えていることは確かであ

ると言えよう。

5 ホモ・マキナリウスにとっての化粧や美容の意義と未来

繰り返して確認するが、現象学の立場を取れば、自我や自己といったものは常にその都度意味を与えられて構成されたものである。構成された自我や自己は、一種の像、イメージであり、実体ではない。それゆえ常に作り変え可能なものであり、その内実である意味も常にその都度揺れ動いている。それゆえ自我や自己はほんの些細なきっかけで容易に変化し崩壊しうる。アイデンティティは、揺れ動き容易に崩壊しうる脆弱な自我や自己の軌跡を一種の物語として記憶したものの集合体である。こうしたことから、自我や自己やアイデンティティが崩壊することないように修正し、更新し、その結果を確認する作業を怠ることなく行う必要が生じる。こうして、意識的であれ無意識的であれ、自我や自己を修正・更新し、確認する作業を、われわれホモ・サピエンスは日常的に絶えず行っている。この修正・更新・確認作業にとって、化粧や美容は絶大な力を持っている。

たとえば、朝起きたときから髪型が思うようにならなかったとする。それだけで気が晴れない1日になる人が少なからず存在する。通りがかりのビルのガラスのドアやエレベーターの鏡などを通して、ふとした折に目に入る自分の像は、気に入らない髪型ばかりが目を引き、「本当はこうではなかった自分」、「自分の思い通りにならなかった自分」という像、言い換えれば「不本意な自我像」をたびたび目にするようになる。自我は像であるため、こうした日は不本意な自我像が自我であることになり、それゆえ晴れ晴れとしない気分をもたらす。しかし反対に考えれば、自我は像であるため修正は容易で、理想的な自分になれる可能性も十分にある。技

術が低く自分ではできなくても、プロの力を借りれば難しくないかもしれない。たとえば髪型は美容師に、服装はスタイリストに、肌はエステティシャンに、女性の場合はメイクをメイクアップアーティストに任せることで、理想的な頭部が得られ、それによって良い方向に自我像が修正できる可能性がある。体形は頭部より困難であるかもしれないが、プロの手を借りて食事や運動、生活指導など、さまざまな方法を組み合わせて理想的な自我像に近づくことは可能である。さらに、言葉遣いや立居振舞いなどもフィニッシングスクール講師などの指導者の力を借りて理想的なものに変えることは難しくないだろう。自我が像であるのは自分自身に対してだけではない。誰に対しても自分の自我は像である上に、とくに他者は本人の心の中を覗き見ることができないため、どのような人物かという人物判断を外見的要素が大きく左右することは必定である。それゆえ、外見を変えた場合に、自分自身の自我像が変化するより前に、他者が自分に対して持つ「自我像」が変化する可能性が高い。その結果、他者からの自身の扱いや応対に変化が生じることで、自我像の変化はさらに増幅されることになる。

まとめれば、外見は自我像形成の重大な要因であり、自我像の軌跡がアイデンティティであるため、アイデンティティをも左右する。化粧や美容が自我や自己やアイデンティティに絶大な力を持つとはこういうことである。しかしこれは「ホモ・サピエンスの場合」という限定付きかもしれない。ホモ・マキナリウスは身体そのものと記憶を常に容易に交換できるため、自我や自己はその都度だけのものである。ホモ・マキナリウスにはアイデンティティが成立しない。これらを考えると、ホモ・マキナリウスにとっての化粧や美容は身体交換のごく軽便なものという位置づけになり、その瞬間だけのもの

であって、自我やアイデンティティに関わるものではないことになる。それゆえ、ホモ・マキナリウスにとって美容や化粧はどうしてもよいもの、取るに足らぬ軽微な行為になる。ホモ・サピエンスにとって美容や化粧は「なくてもよいもの」と言われ続けているにもかかわらず、歴史上一度も途絶えたことがなく、人類の存在するところどこでも存在し続けており、衣食住と並ぶ生活文化の1つとして位置づけることができるように（注10）、実はなくてはならないものとして存在し続けてきた。その理由は、ホモ・サピエンスは自由に顔や姿かたちを改変することが難しいためにそれを補う役目が化粧や美容にあるという考え方もあるが、それ以上に、自我やアイデンティティの形成に多大な力を持つことにより、自我やアイデンティティの安定を大いに手助けするからである。しかし、ホモ・マキナリウスにとっては美容や化粧はその存在意義を持たない。趣味や気まぐれ、気晴らしにそれらの行為が実施される可能性は十分にありうるが、ホモ・サピエンスと違ってその行為に必然性はない。これが本研究の結論になる。

注

- 1 ヒューマンオーグメンテーション（英語 human augmentation）とは、東京大学大学院情報学環教授で、ソニーコンピュータサイエンス研究所（ソニー CSL）の副所長でもある暦本純一が提唱する考え方で、人間と一体化して人間の能力を拡張させる科学技術の開拓を指し示す語である。東京大学とソニー株式会社が次世代を牽引する技術系人材の育成と強化を図ることで2017年3月に合意し、同大学に「ヒューマンオーグメンテーション（人間拡張）学」という名称の寄付講座を設け、セミナー等の活動を開始した。これは、名称は異なるが人間

- 拡張工学と同種類の研究と考えられる。
- 2 トランスヒューマニズム（英語 transhumanism）とは、人体と機械の融合と、脳（とくに神経活動）とコンピュータの融合により、飛躍的に能力の拡張を図った、これまでの人類とは異質の新たな人類が近い将来出現するという考えに基づき、その新たな人類に対する名称である。アメリカでは2016年に実施された大統領選に当たって、ゾルタン・イシュトバンがトランスヒューマニスト党（英語 Transhumanist Party）という政党を立ち上げて党首として立候補した。同党は次の注のカーツワイルとも関係が深く、近くトランスヒューマンは実現するという考えを主張し、人類のトランスヒューマン化を促進することに賛同した人々の政党である。
 - 3 シングularity（英語 Technological Singularity）とは、技術的特異点という邦訳が定着しており、人工知能が人類の能力を超える、さらに人工知能と人類の身体が融合することで、進化の点で人類が一定の速度を超えて進化したかのように見える時点を指す。レイ・カーツワイルが提唱した語で、カーツワイルが2045年と想定したことから、「2045年問題」と言われることもある。
 - 4 山本一成『人工知能はどのようにして「名人」を超えたのか？』ダイヤモンド社、2017年、朝日新聞 Digital2017年 5月20日ほか、各種取材での発言
 - 5 富田守『人類学レクチャー第3版』富田守発行（自費出版）、2017年、p.56
 - 6 同上書、p.57
 - 7 同上書、p.57
 - 8 同上書、p.56
 - 9 同上書、p.60
 - 10 富田は同上書で「ホモ・マシナリウス」と記している。ラテン語の英語読みであるため、筆者は哲学研究者としてラテン語読みの「ホモ・マシナリウス」とここでは記すことにした。
 - 11 化粧は文化であること、それと並んで人類の歴史において時間と空間の双方で化粧は普遍的に存在し続けている事実があることを、筆者は拙著『化粧せずには生きられない人間の歴史』、講談社、1999年ほか、機会ある毎に発言し続けている。それは、こうした事が社会的にまったく共有されていないためである。

おもな参考文献

カーツワイル『シングularityは近い』、NHK 出版、2016年

カーツワイル『ポストヒューマン誕生』、NHK 出版、2007年

この論文のテーマは以前から折に触れて考えてきたものであるが、恩師富田守先生の『人類学レクチャー第3版』から人類の歴史の概観が得られたことが、思考が一定の形をとって論文へと歩みを進めるための大きな推進力となった。ここに富田守先生に感謝を捧げる。